

平成27年2月5日発行(毎月5日1回発行)  
第55巻2月号(通巻667号)

# 風土



2

筆休

神蔵

器

鴨の来て多情多恨の神田川

煤逃げや釣堀に糸高鳴つて

寄りたがる柚子湯の柚子をつき放す

菊池医院

扁額に「鬼手佛心」や石路の咲く

美しき妻の忌日やクリスマス

十二月二十五日や聖歌あふれ

武相荘 二句句

笹子鳴く庭に手作り椅子一つ

山を打ち枝移りして冬の鶺鴒

湯豆腐を所望したるを少し悔い

筆休鳥総松まで眼のとどく

人日や城太郎師の念珠の手

大熊手吉祥天女をひとり占め



# 竹間集

同人作品



冬 薔 薇

門 伝 史 会

お目当てはうなぎの老舗一の西  
入館の列のしんがり初しぐれ  
狂言の踏む足拍子神の留守  
転びてもしかと握りて千歳飴  
どの階も物干す勤労感謝の日  
用それぞれ二人の暮らし小六月  
冬薔薇一志あるごと咲きにけり

「老樹」以後(十)

野沢しの武

初学遠し二師すでに喪く老の夏  
牡丹剪る亡き両親に亡き妻に  
俄雨降るぞ降るぞと雨蛙  
全山の蟬抜け来しが庭に蟬  
亡妻が巻きしか綻び見えて落し文  
夕焼に立てば吾が影丈長し  
賞味期限際のぜんざい冷蔵庫に

年 の 幕

鈴木 石一花

神保町書肆街歩く秋日和  
『死刑囚からの恋うた』木の実落つ  
涙して読み返す書や秋深し  
水澄むや善心潜む死刑囚  
独房に腹心の句や時雨れけり  
うたかたの恋の句クリスマスツリー  
過不足なき吾に佳句無き年の暮

年木積む

岩木 茂

文化の日熱き味噌汁啜りゐて  
安国禪寺南天の実の白凝りて  
満天星の紅葉明かりに座禅組む  
楮干す手のひらひらと小六月  
山神に楮<sup>かた</sup>奉る紙衣かな  
年輪の渦の大小年木積む  
宇宙船より見えたのは竜の玉

国際射撃場界限

相沢 有理子

老若の射撃確かやそぞろ寒  
的碎く射撃や黄葉照り翳り  
蒲の絮ゆらぐ古民家喫茶良し  
紅葉泛く庭の灯明かり食前酒  
無住寺の朽ちし濡れ縁木の実落つ  
父と子と巢箱見廻る枯れの森  
里神楽かんらんらと刀自笑ふ

桂郎忌

小林 輝子

みちのくのたまゆらの晴れ桂郎忌  
風土五十五周年過ぐ木守柿  
茶の花の蕊金色に惜命忌  
合掌に井柵に組める牡丹粗朶  
牡丹の粗朶軽しとも重しとも  
木守りの御居処のあたり黒ずめり  
振り仰ぐ裸木の梢雲急ぐ

五合庵

小野寺節子

冬ざれや立礼古ぶ分譲地  
起き伏しを三寒四温にあやつられ  
「立冬」の言の葉を抱き空仰ぐ  
追憶や出雲風土記の雪女郎  
はや一年振り返りみる十一月  
浮かびきたあの柏原一茶の忌  
一句二句の俳句で秋呼ぶ五合庵

伊根の冬

岩木 茂

千 畳 の 網 敷 き 替 は る 冬 霞  
大<sup>お</sup>敷<sup>し</sup> 網<sup>き</sup> に 片 脚 立 ち の 冬 の 虹  
あ れ こ れ の 魚 を へ し こ に 伊 根 の 冬  
大 根 干 す 波 影 る ふ の 舟 屋 口  
魚 選 る や 水 母 を 雪 に 打 ち 捨 て て  
長 鈷 を 舟 屋 の 壁 に 雪 起 し  
降 る 雪 や 古 文 書 と な る 勇 魚 取 り  
冬 菜 畑 舟 屋 母 屋 が 風 除 け に  
大 敷 網 に 見 る 見 る 雪 の 吸 ひ 込 ま れ  
鰯 敷 や 太 き 日 矢 立 つ 日 本 海

# 山河集

同人作品



神蔵 器選

経蔵を廻せば見ゆる冬の海

内藤 静

国宝展出でて高々冬の月  
冬の蝶受難のごとく翅ひろげ  
叡山のケーブルの急葛の花  
輪になつて潜れば鳩に違ひなく

佐野つたえ

承知して十年日記買ひにけり  
落ち葉して仏足跡の指先に  
紅葉月十夜法要札の立つ  
チューリップ球根植ゑて冬に入る  
夕食にリクエストあり鱒大根  
冬ざれやいとこ煮の材一つ欠け  
シチューの火止めて子を待つ冬の夕  
暖房や待合の戸のひとりでに

折田 京子

親鸞忌この地に在らば門徒なり  
極月の馴染みの顔のナースかな

西村 雪園

照紅葉見上げ唱歌の揃ひけり  
柿二つ貰ふ金剛山麓かな  
紅葉もねねの道より高台寺  
顔見世や団栗橋で待ち合はせ  
効く薬治るくすりや十二月

上辻 蒼人

棚田みな刈田となりて眠るだけ  
紅葉寺地上に日の斑生まれけり  
透きとほる水の走りし紅葉谿  
男ぶりよかり冬木の大銀杏  
公園は大人ばかりとなる冬日

◇特別作品◇(抄)

冬すみれ

小林 共代

初日さす伊予ヶ岳より海望む  
二の鳥店抱きて山の眠りけり  
伏姫の祠にほのと冬すみれ  
寒晴れや城址に祀る八剣士  
石翁の農神像や淑氣満つ  
臘梅や鶏の蹤きくる農の庭  
波音に崖の水仙育ちをり  
背負籠に切口濡れし水仙花  
枯野駅上りを待ちて下り発つ  
ほつほつと遠き狐火安房の旅



# 風土集



## 神蔵器選

母の忌は永久に勤労感謝の日 川崎

内藤 静

短日や中から減つて縄の束

指揮棒の上がりしはぶき一つなし

子の声の変はりそめしや冬萌ゆる

ひもろぎは要石なり鷓鴣

短日の兼六園り芭蕉句碑

津山

生田恵美子

しぐるるや能登をはるかに芭蕉句碑

兼六園しぐれの傘を持ち歩く

保育園の居のこり組の冬灯

夕しぐれ子に諭されてをりにけり

相模原

岡本 尚子

野宮に黒木鳥居や初しぐれ

野宮に安産祈願所しぐれけり

足湯ある嵐山駅冬に入る

モーニングに冬帽置きて棺閉づ

ボガードを模して父の冬帽子

背負はるる廻し地蔵や小六月 川崎

鈴木 庸子

拭き細る格子引引戸や花八ツ手

チャリテイの百円文庫文化の日

北陸へ伸びる新幹線冬田打つ

セーターに持つてゆかれし首もどす

鷹匠の腕より天空翔ぶ構へ

川崎

水井千鶴子

葛咲くや山の麓に発電所

畳屋が来て予算組む小六月

しぐれ傘振つて入りぬ美術展

冬帽子抱へて拝す九品仏

相模原

雲所 誠子

つくばひの水は瑠璃色一位の実

紅葉散る哀史勝頼終焉地

水音に添ふる紅葉や梅園碑

短冊に残る墨の香菊日和

へだたりてみて一对の帰り花

畦一つ跳んで十一月に入り川崎 井口ふみ緒

初霜や頭部MRIを受く

時雨るるや三年坂の切山椒

柊の花咲く青柳寺を訪ね

二十分の頭部撮影薦紅葉

男来てすいと買ひたる冬帽子 川崎

汝も一人吾も独りや玉子酒

冬紅葉素知らぬ顔の風見鶏

何時か行く道かも知れず一茶の忌

序では序でありぬ日記買ふ 横浜

盆栽も力の限り紅葉かな

伊那谷や中央アルプス雪化粧

伊那谷に林檎たわわや青き空

手を添へて少し捻りて林檎もぐ

秋惜しむ望岳楼てふ宿をとる 盛岡

冬の雨木々の身浄め地に恵み

太大根黒土のまま土産とし

若き亡母アルバムに居て稲担ぐ

雪見湯と真昼の宴女たち

金庫鍵番号忘れ師走入り

崩え兆す人切株に冬の立つ 津山

歩み寄る嘴太鴉冬の貌 生田 作

行き違ふ列車待つ間のしぐれかな

北風止んで檜の匂ひかな

家ごとに小橋渡して峡小春

千枚の大根畑杜一つ 横浜

週ごとに投葉一つ冬萌えて

五線譜の鳥の音符やみそさざい

鉛筆のBを愛用一葉忌

百円の白木の長橋川涸れぬ

オスカルのマント広がる冬の薔薇 東京

一万人のラインダンスや小春風

図書館はチャペルの前や棟の実

ヴォーリスのチャペルにポインセチアかな

虚子庵の北窓ふさぐ遠浅間山 福生

雪吊の一本にある命かな

振り返る善財童子返り花

かさなつてぬれば楽しき落葉かな

踏み出せぬ十一月の一步かな

木枯一号日本橋より出航す

一系の天子初富士世界に燦

餅花や母の世わが世重ねみる

この撥ねの力の吉書かな

ふる里の山河あまねく恵方とす 相模原 天野みゆき